

個体化論の行方―シモンドンを出発点として⁽¹⁾

中 村 大 介

「個体」あるいは「個体化」の問題を、一九世紀以降、生物学と切り離して論じることとはできないだろう。現在では、分子生物学の成果やオートポイエーシスの議論などと切り離して「個体」を論じることなど、到底できないように思われる。しかし哲学上長い歴史を持つこの問題について、もはや哲学は何も言うことができない、というほど事態は単純ではあるまい。本稿では、新たな個体観、個体化論を打ちたてようとした二〇世紀半ばの哲学者ジルベール・シモンドンの議論を検討し、彼の議論にインスパイアされた哲学者がどのようにして彼の議論を展開させたかを見ることで、現在における個体化論の二つの動向を取り出してみたい。

議論は次のように進む。まず第一節ではシモンドンの個体化論を概観する。個体化論の枠組みを簡単に紹介した後で、その範例として技術的対象の個体化を挙げ、彼の個体化論を明確にする。続く第二節ではシモンドンの議論に含まれる不徹底を指摘し、その不徹底の理由を明らかにする。そして第三、四節ではそのシモンドンの不徹底を克服しようとした二人の哲学者の議論から、シモンドンを起点とした個体化論に二つの動向があることを示す。第三節ではベルナール・ステイグレルの議論を、第四節ではジル・ドゥルーズの議論をそれぞれ取り上げる。

一、シモンドンの個体化論の概観

シモンドンの個体化論の基本的な着想は、「個体から出発して個体化を考えるのではなく、むしろ個体化を通して個体を考える」(IGPB, p. 22)とて一言に要約される。この言葉の内実を取り出す形で、彼の個体化論の枠組みを、主に『個体とその物理的・生物学的発生』(一九六四年)を使ってまとめることにする。

「個体から出発して個体化を考える」という従来の「個体化の原理」の発想、それこそがシモンドンの最大の批判対象である。特に彼が批判するのが「質料形相論」と「原子論」という二つの考え方である。一方でアリストテレスに端を発する「質料形相論」においては、それ自身個体化された「形相」及び「質料」という領域から個体の生成が語られ、他方でデモクリトス以来の「原子論」においては、構成済みの個体から個体の生成が考えられる。しかしこれらはいずれも個体の生成を説明するのに個体を前提するという「承認しがたい論点先取」(Garelli, p. 57)を含むことになる。この根本的な欠点を克服するためには、「質料形相論」と「原子論」が暗黙のうちに認めてきたある前提を、別のものに置き換える必要がある。

その暗黙の前提こそ「安定した stable」平衡状態という考えである。シモンドンによれば、「安定した平衡状態」が知られていなかったがゆえに、個体化はこれまで適切な仕方では思考されることも、記述されることもできなかった」(IGPB, p. 24)のだ。そして彼は「安定した平衡状態」を「準安定的な metastable」平衡状態という考えで置き替えねばならない、と主張する²。この平衡状態では、個体ともう一つの他の現実とが常に幾分か「緊張状態 ten-

sion」(IGPB, p. 29, et passim) を有したシステムを作っており、しかもそれは「実在 réel」(IGPB, p. 230) のレベルにあるポテンシャルを常に隠し持っている。⁽³⁾そしてこの「緊張状態」に決定的な「不均衡 disparation」(IGPB, p. 206-222, passim) が生じると、その不均衡を解決しようとして、潜在的であったポテンシャルが「顕在化／現在化し s'actualise」(IGPB, p. 239)、新たな個体が生成することになる。ポテンシャルはこの顕在化／現在化のときにのみ、局所的に見出されるのだ。⁽⁴⁾勿論この新たに生成した個体も他の現実と共にポテンシャルを隠し持つシステムを作り、引き続き「個体化のプロセス」が進展していくことになる。⁽⁵⁾緊張状態を有したシステム内に個体を据えることにより、個体を常に新たな個体へと生成しつつある状態に置かれたものとして捉える、これがシモンドンの「個体化を通して個体を考える」という表現の内実である。

シモンドンはこの枠組みを、物理学、生物学、心理学、社会学の各領域に、少しずつ差異を入れながら適用して個体化論を展開していくが、ここでは範例として彼が「具体化 concrétisation」という特別の名称で呼ぶところの「技術的対象」の個体化を取り上げて、彼の個体化論をより明確にすることにする。⁽⁶⁾

「具体化のプロセス」はシモンドンの技術論の書である『技術的対象の存在様態について』(一九五八年)の中で検討されている。これは、各構造が特定の一つの機能しか果たしていなかった技術的対象(抽象的対象)が、複数の機能が一つの構造に凝集するようになった技術的対象(具体的対象)へと発展する個体化のプロセスのことで、⁽⁷⁾前者において各構造間に生じてしまう「全体の機能を損なう」「二次的な効果」(MEOT, p. 34)を相殺するような形で、後者の構造が組み上げられる。こうした具体的対象の一例としてシモンドンは Guimbal タービンと呼ばれるものを挙

げている。このタービンは金属カバーで覆われた発電機とつながれた上で水圧管の中に入れられている。またその金属カバーと発電機の間にはオイルが封入されている。ここで水とオイルは次のような仕方では複数の機能を凝集している。すなわち一方では水がタービンと発電機を動かすエネルギーをもたらすと共に、高温となった発電機の熱を逃がし、他方ではオイルが軸受けの圧力によって発電機に注油を行うと共に、自らの高圧力によって水の浸入を防ぐ。水とオイルは、悪影響を互いに打ち消しあっているのである。

そしてこの機能の凝集において重要なのは、このタービンが予め存在する水とオイルという環境の中に単に置かれたのではない、という点である。むしろ自然的要素（水、オイル）と技術的要素（タービン、発電機）がシステムの「自」条件付け *auto-conditionnement*（MEOT, p. 50, 55）により「連合」されて、一つの環境（連合環境）が産み出されているのだ。シモンドンは具体化に関して次のように総括している。「（…）具体化とは、既に与えられている環境によって条件付けられるのではなく、環境の誕生を条件付けるプロセスのことなのである。（…）発明が存在するのだ、というのも、その発明が、己の創出する環境の内部で設立する関係によって実現され、また正当化されるような、そうした跳躍があるからである」（MEOT, p. 55）。技術的対象は、己自身を可能にするような環境を不連続的に創り出すことで、発展していくのである。

この具体化のプロセスを個体化論の議論に沿って再構成しておく。抽象的な技術的対象では各構造が悪影響を及ぼしあっていた、つまり不均衡が生じていたのに対し、そこに「発明以前には潜在的にのみ存在する環境」（MEOT, p. 55）を顕在化／現在化させてその不均衡を解決することで、具体的な技術的対象が発明される。そして、この具體的となった技術的対象もやはり連合環境との間に不均衡を有し、潜在的なポテンシャルを秘めているのであって、

さらにより具体的となった技術的対象が発明されていくことになる。

以上のことを踏まえて、具体化のプロセスを簡略化して示しておこう。第三、四節でシモンドンの個体化論を展開させる二つの方向を示す際に、またその二つの方向を比較する際に、この簡略化は役立つことになる。へ既に与えられている環境に対応する対象が創り出されるのではなく、新たな環境とセットになった対象が創り出されるへ（具体化の定式）。

以上でシモンドンの個体化論を概観し終えた。次節ではこの個体化論をゲシュタルト心理学の用語で語り直し、それを通じて彼の個体化論の不徹底な部分を指摘する。

二、シモンドンの個体化論の不徹底

シモンドンはゲシュタルト心理学を随所で参照している。『技術的対象の存在様態について』では、特にその「図―地」関係についての考えが大きく参照され、技術的対象に「図」の役割が、連合環境に「地」の役割がそれぞれ与えられている（MEOT, p. 59）。また前節で見た通り、「連合環境」は既に顕在化／現在化しているのだから、この連合環境自身がさらなる潜在的な環境、つまり「ポテンシャル」を秘めていなければならない。このことを踏まえると、技術的対象について、ゲシュタルト心理学の用語を使って次のように書くことができる。へ技術的対象における、個体Ⅱ「図」と連合された環境Ⅱ「地」は、新たな「図―地」関係を産み出しうるポテンシャルⅡ「地そのもの」を潜在的に持っているへ。¹⁰⁾

この「地そのもの」⇨ポテンシャルのレベルを維持することはシモンドンの個体化論の根幹に関わる問題である。なぜなら、従来の個体化の原理で暗黙の内に前提とされていた「安定した平衡状態」を「準安定的平衡状態」に置き換える重要性を指摘し、後者を「ポテンシャル」を秘めた個体のシステムとして彼は考えているのだから。しかしながらここで一つ疑問が生じる。果たしてシモンドンは彼の哲学の賭け金とも言うべき「地そのもの」を首尾一貫して取り出せているだろうか？ これは微妙な問題なのだが、一応否定的に答えることができる。それを示す箇所として、ここでは彼の「地」概念の使用例を見ることにする。

シモンドンが「地」概念を用いるとき、それは基本的には「図―地」関係を産み出す「地そのもの」という意味で用いられている。「地はダイナミズムを隠し持っている。(…)地とは徐々に進展していく潜在性・ポテンシャル・力のシステムなのである」(MEOT, p. 58)。これは、地よりも図の安定性を知覚において重視するゲシュタルト心理学を批判する文脈で出てくる一節である。しかし彼は随所で「地」を「図―地」関係における「地」という意味で、つまりゲシュタルト心理学の意味で使っている。それが最もはっきりと現れるのが『技術的対象の存在状態について』の第三部である。シモンドンはここで、人間と世界の関係が次々と二分化していくプロセスを記述している。彼によれば原初の魔術から宗教と技術が二分化し、さらにその宗教と技術の理論的状態から科学的知が、両者の実践的状態から倫理的思考が、それぞれ分化して現れたという。今はこの二分化のプロセスそのものの正当性は問わないでおく。問題は、彼自身こういった二分化における生成が個体化論における「個体化のプロセス」と同義であると明言しているにも関わらず(MEOT, p. 154f)、次のような記述をしていることである。「この二分化『原初の魔術から技術と宗教への二分化』は『魔術における』地と図を分離し、図は技術の内容を与え、地は宗教の内容を与える」

(MEOT, p. 169)。「地と図を分離」する、地と図が分化する、こういった表現は繰り返し登場する。しかし「地と図」を分離可能なもののように捉えることは、ポテンシャルⅡ「地そのもの」が「図―地」関係を産み出すという個体化論での議論と相容れないのではなからうか。個体化論の議論に沿って二分化のプロセスを語ると言っているにも関わらず、シモンドンは自らの個体化論で最も重要な役割を果たすと言っても良い「地そのもの」をここでは取り出せていないのである。

シモンドンは「地」概念を「地そのもの」という意味にも、「図―地」関係における「地」という意味にも用いる。それゆえ、「地」と「地そのもの」の概念的区別をしなかったことに、シモンドンが「地そのもの」を首尾一貫して取り出すことができなかった原因があるのではないか、以上のことからそう考えることは不自然ではないはずである。シモンドンの個体化論を展開させる賭け金は、まさにこの「地そのもの」をどのように考え、どのように概念化するか、というところにある。ここではこのレベルを独自の仕方で練り上げ、シモンドンの個体化論を継承した二人の哲学者の議論を検討する。まず一人目はベルナル・スティグレルである。彼は技術的対象そのものに潜むものとして「地そのもの」のレベルを捉え、さらにデリダの議論を取り入れることでシモンドンの個体化論を刷新しようとしている。そして二人目はジル・ドゥルーズである。彼は「地そのもの」、「ポテンシャル」をシモンドン以上に適切に概念化することによって彼の個体化論を取り上げなおそうとしている。ここでは両者の議論を、「地そのもの」のレベルについての着想、そして個体化のプロセスについての議論、という二点から主に見ることにする。

三、展開の方向（1）——ベルナル・ステイグレルの場合

本節ではステイグレルの議論を取り上げる。「個体化」についての彼独自の議論を追い、その後で彼がどのように「地そのもの」のレベルを考えたかを見ることにする。しかしステイグレルの「個体化」についての議論を追うためには、まずは彼が絶えず参照するジャック・デリダの「差延」や「代補」についての議論を見ておかねばならない。

デリダの「差延 *différance*」の運動とは、彼自身『ポジシオン』の中で述べているように、同じ運動でありながらも文脈に応じてしかその意味や効果を確定できないものとされる。¹¹しかしその基本的な構造は彼自身「代補の構造」と呼ぶものと等しい。その代補の構造は、一九六七年の『声と現象』では「ある可能性がそこに追加されると言われる当のものを、その可能性が遅ればせに産み出す」(Derrida, 1967 a, p. 99)と定式化されている。ここではよく知られているエクリチュール論でこの「代補の構造」を確認しておくことにする。デリダによれば、パロール（話し言葉）をエクリチュール（書き言葉）が後から代補するといったタイプの議論が、プラトン以来、哲学の歴史の中で一貫して見られるという。しかしこうした議論は実は転倒している。パロールの中にもエクリチュールの性質（例えば反復可能性）は棲み付いているのであって、エクリチュールから遡行的に考えられた効果／結果（effet）としてパロールの優位は与えられているに過ぎない。パロールとエクリチュールは切り離しえず、対となつてのみ産み出されるのだ。この対立する概念対を産み出す運動がここでは「差延」と呼ばれる。「差延」はまたパロールの先行性と優

位性、そしてそれらを貶めるものとしてのエクリチュールの二次性を語る、いわゆる音声ロゴス中心主義を暴き出すためにもここでは機能している。以上のことから、ここでの「差延」の運動は次のような「代補の構造」を持つことになる。ヘエクリチュールが、そこに追加されると言われるパロールを、遅ればせに産み出す。

さて、ステイグレールはこの「差延」の運動、あるいは「代補の構造」が、シモンドンの「具体化の定式」と同じ構造をしていることに注目する。つまり、シモンドンにおいては技術的対象と環境が対になって、デリダにおいてはエクリチュールとパロールが対になって産み出されるという類比にステイグレールは注目したのである。またステイグレールは「具体化の定式」に含まれる関係性を一般化したシモンドンの「転導的 transductive」関係⁽¹²⁾を、一つの項が他方の項なしには存在しえないような、また両項が共に構成しあうようなそうした関係」(Stiegler, 1996, p. 10)と定式化し直し、この関係を産出する原動力としてデリダの差延を捉えてもいる。

転導的關係を産み出す「個体化」のプロセスは、ステイグレールにとってデリダの「差延」の運動と等しい。しかし何故シモンドンの議論にデリダのそれを重ねあわさなければならないのだろうか。それはステイグレールによれば、シモンドンの議論にはある種の人間主義が残存しているためである。例えば技術的個体における連合環境の創出は、シモンドンによれば「人間の知性によってのみ可能となる」(MEOT, p. 56)。ポテンシャルを顕在化させるためには人間の知性や「先取りという発明的機能」(Ibid.)が不可欠なのだ。しかしこれでは、連合環境に先立って個体化された人間が存在することになってしまふ。しかしシモンドンの考えを徹底化させるならば、人間と技術的対象は、個体化のプロセスによって同時に発明されるのでなければならない。ステイグレールは技術的対象の発明を、新たな連合環境の創出を伴うものと考えただけでなく、また技術的対象と人間の新たな関係を発明するものとしても捉

えるのだ。「技術が人間を発明し、人間が技術を発明する」(Stiegler, 1994, p. 148)。スティグレルはこの技術と人間の相互構成性を表すために、前者に対しては「*quoi*」(フランス語で「何?」を表す疑問詞)という語を、後者に対しては「*qui*」(同じく「誰?」を表す疑問詞)という語をそれぞれ当てている。そして彼はシモンドンの人間主義を取り除くようなこの着想を、デリダが『グラマトロジーについて』の中で、「生き物 (*le vivant*) を生き物ならざるもの (*le non-vivant*) 一般の上で分節化する」(Derrida, 1967 b, p. 95) と述べた「差延」の特徴から引き出している。「生命の歴史」の一段階である、*quoi* の発展と絡み合って進展する *qui* の歴史¹³、そしてその両者の構成の際に働く「差延」の運動、これこそが彼の考える個体化のプロセスに他ならない。

では次にシモンドンの「地そのもの」のレベルについて彼はどのように考えているのか。彼はこのレベルを「既にそこにある」と *le déjà-là* という言葉を使って表している。「既にそこにあること」とは、「私が体験しなかったにもかかわらず私の過去であり、また、それなくしてはいかなる私自身の過去をも私は持つことができないであるだろうような、そうした過去」(Stiegler, 1994, p. 150) とされる。まず「私の過去」とは何か。彼によればそれはフッサールの内的時間意識の議論における「第一次記憶」|| 過去把持、「第二次記憶」|| 想起のことである。¹⁵そしてこの「私の過去」を支えている過去こそ、「既にそこにあること」というレベルにある過去であり、技術的対象、すなわち *quoi* がその伝達を、あるいはそれへのアクセスを可能にする過去とされる。*quoi* はシモンドンの主張する具体化のプロセスにより独自の歴史を持ち、また過去を担っている。そしてこの *quoi* の持っている「過去」がなければ私の「過去」もまた構成されることはないだろう(この過去は「第一次記憶」と「第二次記憶」と対比させられて「第三次記憶」とも呼ばれる)。*quoi* が蓄えている独自の過去を前提として、*qui* と *quoi* の新たなカップリングを産み

出す差延の運動が生じていく、そしてその *quantité* に蓄えられた過去からさらなる差延の運動が生じていく……ステイグレルの個体化論の枠組みを大まかにまとめればこのようになる。彼の個体化論は、シモンドンの個体化論の中でもとりわけて技術的対象の個体化（具体化）に注目し、そこに存する人間主義を取り除くためにデリダの議論を重ね合わせることによって、生命の歴史と不可避に結び付けられたものとして技術的対象の発展を考えるものである¹⁶⁾。

四、展開の方向（2）——ジル・ドゥルーズの場合

次にドゥルーズの議論である。彼は晩年まで持続的に個体化論を展開しているが、ここではシモンドンを踏み台に個体化論を論じている『差異と反復』に議論を絞ることにする。そして前節とは逆に、彼が「地そのものの」、「ポテンシャル」をシモンドン以上に適切に概念化した点をまずは取り上げ、その後、彼による個体化のプロセスについての基本的議論を見ることにする。

ドゥルーズがベルクソンと共に導入する「可能的なもの *le possible*—実在的なもの *le réel*」、「潜在的なもの *le virtuel*—現在のなもの *l'actuel*」という二つの対の区別、とりわけ、「可能的なもの」と「潜在的なもの」の区別は有名であるが、これらの区別はまた「ポテンシャル」概念を一貫して取り出すことにもつながる。一方で可能的なものが「実在的なものに対立し」、「事後的な産物、その可能的なものに類似しているものに似せて遡行的にでっち上げられたもの」であるのに対し、潜在的なものは「実在的なものに対立せず、それ自身で十全な実在性を所有している」とされる。そしてその潜在的なものの「プロセスが顕在化／現在化なのである」が、「現在のな諸項は潜在性と類似し

ていなく」(Deleuze, 1968, p. 272 f)。

「潜在的なもの」は、「可能的なもの」のように事後的に作り上げられたものではない、つまり発明の瞬間にのみ顕在化／現在化するものであるが、にもかかわらず「実在的なもの」である。これがシモンドンの「ポテンシャル」に対応することは明らかだろう。また「潜在的なもの」という用語を使っているがために、シモンドンのように顕在化／現在化した連合環境Ⅱ「図—地」関係における「地」と混同されることもない。ドゥルーズの「潜在的なもの」は、シモンドンが不徹底な仕方では取り出すことのできなかった「ポテンシャル」を、より適切に概念化したものと評価することができる。

さてこの「潜在的なもの」は、例えば図と地のような「少なくとも二つの大きさのレベル、異質な現実の二段階」の間に配分されている。この異質な現実の二段階は常に「齟齬 disparate」あるいは「不均衡 disparation」(Ibid., p. 287) の状態にあるのだが、ドゥルーズはこうした不均衡状態を「強度 intense」と呼んでいる。不均衡状態を「強度」と呼ぶことの重要な含意は、まさに不均衡こそが図と地のような現実の二つのレベルを産み出すのであり、図と地、高と低、右と左などを産み出す「深さそのもの la profondeur elle-même」である (Ibid., p. 295) 17。という見方を提出できる点にある。そして縦、横、奥行きといった延長を繰り広げる不均衡すなわち根源的な「深さ」、それこそが個体化の行われる「場」となる。個体化とは「齟齬をコミュニケーションさせあうこと」であり、諸強度量／内包量 (quantités intensives) 17 の本質的プロセスである。つまりドゥルーズが考える個体化のプロセスとは、配分されたポテンシャルⅡ「潜在的なもの」を強度の働きが現実化／顕在化させることで、不均衡を解決し、新たな現実の諸レベルを作り出すことであり、¹⁸⁾ 勿論その基本的な議論の枠組みを提供しているのはシモンドンである。第一

節でも見た通り、シモンドンにおいて「不均衡」とは、個体を含むシステム内部の不均衡、技術的対象で言えば各構造の間に、あるいは個体と連合環境の間にある不均衡のことであり、その不均衡の解決のプロセスが個体化のプロセスと捉えられていた。ドゥルーズは、シモンドンの議論を基本的には踏襲しつつ、「ポテンシャル」、「地そのもの」を「潜在的なもの」とより適切に概念化し、さらには「不均衡」を「強度」と呼ぶことにより、シモンドン以上にその「不均衡」を肯定的に捉える視点を打ち出したのである。

以上でスティグレルとドゥルーズによるシモンドンの個体化論の継承を見た。まとめておこう。一方でスティグレルはシモンドンの特に技術的対象の個体化（具体化）の議論を継承した。その際、シモンドンの議論に含まれる人間主義を取り除くために、デリダの「差延」の発想を用いて、*qui*（人間）と *quod*（技術的対象）は相互に構成し合うと主張した。また、*quod*の有している「既にそこにあること」という特殊なレベルの過去こそ、シモンドンの「地そのもの」、「ポテンシャル」に当たるものだった。⁽²⁰⁾他方でドゥルーズはシモンドンの個体化論一般の枠組みを踏襲する。その上で、シモンドンの不徹底な概念設定を取り除くべく、「潜在的なもの」という概念を用いて「地そのもの」、「ポテンシャル」のレベルを表現し、さらに個体化のプロセスを不均衡の「強度」が引き起こすものと捉え、シモンドン以上に不均衡に大きな力を与えたのであった。

ではスティグレルとドゥルーズ、どちらの議論がよりシモンドンの個体化論を実り豊かに受け継いでいるだろうか。また個体及び個体化の議論としてどちらがより生物学的、広くは科学的な正当性を持つであろうか。前者の問いに対しては、まだ両者の議論の接合の可能性も検討していない本稿では、残念ながら答えることができない。しかし

後者の問いに対してはこう答えることができる。どちらも科学的な正当性に関しては留保をつけねばならないにしても、そこから両者の議論を否定してしまうのは早急に過ぎる、と。ジョルジュ・カンギレムが一九四五年に述べた言葉を最後に引いておく。「個体とは一つの現実なのか、それとも幻想なのか、あるいは理想なのか。こうした問いに答えることができるのは、たとえ生物学であれ、ある一つの科学ではない。そしてたとえ全ての科学がそうした説明にそれぞれ寄与することができ、寄与しなければならぬとしても、その問題が言葉の通常の意味で、本来的に科学的なものであるかどうかは疑わしい」(Canguilhem, p. 78)。

※文中の傍点による強調は筆者(中村)のものであり、太字による強調は引用文における原著者自身のものである。

注

- (1) 本稿は二〇〇四年九月一日に日仏哲学会で、同年一〇月一七日に関学哲学会でおこなった研究発表を加筆・訂正したものである。
- (2) 「安定した平衡状態」と「準安定的平衡状態」の対置は彼の個体論の至るところに見られる。例えば IGPB, p. 24, 69, 204, 211, IPC, p. 48 f など。
- (3) 「ポテンシャル」は物理的個体化のレベルでは「ポテンシャル・エネルギー」と言われる。「準安定的平衡状態」、「ポテンシャル・エネルギー」といった言葉から分かる通り、シモンズは個体化論で用いる幾つかの概念を物理学、特に熱力学から借りてきている。
- (4) 以下の記述を参照。「ポテンシャルな潜在性の考えが常に個々特有なもの (particulière) であることを注記しておくことは本質的に重要である。(…) ポテンシャルは現実 (réel) のある種の領域のポテンシャルであって、それが形成する安定したシステムにおける現実全体のポテンシャルなのではない。(…) 技術的行為は技術的挙措のもとで現実化される態勢にある

潜在性に、イマコロ (*hic et nunc*) で出会わなければならない。潜在性は挿入され、局所化されるのであり、個々特有なものである」(MEOT, p. 204)。それゆえシモンドンにおけるポテンシャルはアリストテレスの可能態(デユナミス)とは大きく異なるものである。アリストテレスにおいては、木材の内にあるヘルメスの像、現に研究活動をしてはいないが、研究することのできる者などが「可能態」と呼ばれるが(アリストテレス、三二―三三頁)、シモンドンにおいてポテンシャルとは発明の瞬間にしか見出されないものである。

- (5) 以上の記述からシモンドンの考えはきわめて弁証法的ではないかという疑念が出てくるかもしれない。実際シモンドンは弁証法と自分の個体化論が構造的には一見似通っているということを認めている。しかし彼は以下の三点で根本的な差異があるとしている。(1) 弁証法では余りに存在と生成とが分けられている。しかし生成が存在を変様させるのではなく、存在が生成すると言われるのでなければならない (IGPB, p. 234 f.)。(2) 弁証法では生成がそこで働くところの時間という枠組みが必要だが、個体化としての生成では時間それ自身が不均衡の解決である (IGPB, p. 32)。(3) 否定性は個体化の中の不完全な役割を果たさない。例えば技術的世界においては、否定性とは個体化の欠如であり、自然的世界と技術的世界との不完全な結合である。この否定性は人間をして新たな解決の探究へと赴かせるが、それ自身が技術的存在の内に入り込むことはない (MEOT, p. 70)。

- (6) 技術の対象を範例としたのは恣意的な理由からではない。「批判されるべき」質料形相図式が形相獲得の技術的操作から引き出された(…)範例である」(IGPB, p. 231)である以上、質料形相図式が依拠したところの技術的操作のプロセスに、その図式以上に適切な説明が与えられるかどうかはシモンドンの思想の試金石になるからである。

- (7) それゆえ廣瀬浩司氏は *concretisation* に「凝集」の訳語を与えることを提案している(廣瀬、二九頁)。
- (8) 以上 Guimbal ターゴンの例は、MEOT, p. 54 f.

- (9) なお機能の凝集はまた差異化を伴ってもある。「二つのプロセス「差異化のプロセスと機能が凝集していく具体化のプロセス」は実のところ結び付けられている。差異化が生じうるのは、この差異化がグローバルな働きのための相関する諸効果を、必要な結果の観点から計算された意識的な仕方、集団の働きへと統合することを可能とするからである」(MEOT, p. 31 f.)。

- (10) 「図―地」関係を産み出す「地そのもの」という考え方に関しては米虫正巳氏の論文を参考にした(米虫、三五―三六頁)。

個体化論の行方―シモンドンを出発点として

三三

(11) 差延とは「体系的かつ相互に還元不可能な諸概念の配置を取り集めている」ものであって、「そのそれぞれが作業の決定的瞬間に介入してくる、というよりは際立つ」(Derrida, 1972 a, p. 17)。

(12) シモンドンにおいて「転導性」とは、「統合 (integration) と差異化」(IGPB, p. 158) を通して個体が生成しつつ拡大していく性質のことを言い、物理的個体化、生物的個体化、心理的個体化、社会的個体化、そして技術的具体化といった諸領域で少しずつ異なった意味で使われている。なお、物理的個体化においては、この「転導性」は物理学の発展を可能にしたきた論理であるとさえ言われるが、ここにはバシユラールの「帰納」についての考え方の影響が見られる (Bachelard, p. 10)。

(13) 「差延とは生命一般の歴史である。その歴史の中で差延の分節化、段階が産み出されるのだ」(Stiegler, 1994, p. 148)。

(14) 「位相の存在論」と呼ばれるシモンドン独自の存在論の中で、「ポテンシャル」と同義で使われる「前―個体的なもの」という概念を、ステイグレルは「私たちが既にそこにあるものと呼んできたもの」と同一視している (Stiegler, 2001, p. 148)。

(15) もっとも、彼は「前―個体的なもの」についての自分の解釈がシモンドンのそれとは一致しないことに留保している。ここでは詳しく触れることができなかったが、ステイグレルはフッサールの時間論を、Stiegler, 1996, pp. 217-278 で分析している。

(16) ただしステイグレルの考える技術が「技術的対象」に留まる限り、彼の議論が人間主義に再帰する危険を伴っているとバズワースは指摘している。〔…〕ステイグレルの負っている危険とは、人間化のプロセスに適した、技術の専ら具体化された項「技術的対象」で技術性を考えているというところである」(Beardsworth, p. 49)。

(17) 「強度」は常に「量」を備えたものとされる。「強度は巻き込まれ／前提され (impliquée)」、包み込まれ (enveloppée)、「へ胚珠の状態で与えられている *embryonnée*」量である」(Deleuze, 1968, p. 305)。なお、*quantité intensive* は一般にカントの「内包量 *intensive Größe*」のフランス語訳として知られる。カントにおいて「内包量」とは、部分から全体へと継ぎ的に総合される外延量に対して、知覚の予料として瞬間的に覚知される質の「度」のことであり、ドゥルーズはこの発想を部分的には評価しつつも、カントが延長に「外延量」を、質に「内包量」を割り当てたことを批判し、延長と質へと繰り広げられるような一つ深いレベルに「内包量＝強度量」の概念を割り当てている (*Ibid.*, p. 298)。

(18) 当該箇所を引用しておく。「諸理念」とは潜在的な諸多様性であり〔…〕、差別的／微分的諸要素の間の諸関係によって作

られている。(…)何が、へ理念」の内に共存する諸関係をして質と延長へと自ら異化／分化する (se différencier) よう決定するのか？ その答えは正に諸強度量によって与えられる。答えは顕在化／現在化のプロセスにおける決定因子たる強度である。強度こそがドラマ化する (dramatiser) (Deleuze, 1968, p. 315f.)。そして「強度が個体化を行うのであり、諸強度量が個体化を行うファクターなのである」(Ibid., p. 317)。

- (19) シモンドンの「不均衡」について、ドゥルーズは『差異と反復』刊行の二年前に書かれたシモンドンの『個体とその物理的・生物学的個体化』の書評の中で、既に言及している (Deleuze, 2002, p. 121)。

(20) またステイグレルの議論をヒントに、デリダの著作をポテンシヤルについての独自の試論を含むものとして読むことも可能になると思われる。例えばデリダが九〇年代に入ってから頻繁に用いる「幽霊 fantôme」や「亡霊 spectre」といった奇妙な概念は―実は彼は六〇年代からこれらの概念を用いている (cf. Derrida, 1972 b, p. 129)―、デリダのポテンシヤルについての基本的な着想を示していると思われる。

文献表

(シモンドンの著作のみ以下の略号で指示する。〔〕内は初版年を表す。)

Simondon, Gilbert シルベール・シモンダン

MEOT : *Du mode d'existence des objets techniques*, Aubier, 1958.

IGPB : *L'individu et sa genèse physico-biologique*, Jérôme Millon, 1995 [1964].

IPC : *L'individuation psychique et collective*, Aubier, 1989.

Bachelard, Gaston, *Le nouvel esprit scientifique*, puf (14 ed.), 1978 [1934].

『新しい科学的精神』(関根克彦訳)、『ちくま学芸文庫』二〇〇二年。

Beardsworth, Richard, "Thinking Technicity", in C. Norris & D. Roden (eds.), *Jacques Derrida*

(*Sage Masters of Modern Social Thought*) Vol. 3, London, 2003, pp. 39–54

Canguilhem, Georges, *La connaissance de la vie*, Vrin, 1992 [1965]. 『生命の認識』(杉山吉弘訳)、『法政大学出版局』二〇

個体化論の行方―シモンドンを出発点として

〇二年。

Deleuze, Gilles, *Différence et répétition*, puf, 1968.

—, *L'île déserte et autres textes-textes et entretiens 1953-1974*, Minuit, 2002.

Derrida, Jacques, *La voix et le phénomène*, puf, 1967 a.

—, *De la grammatologie*, Minuit, 1967 b.

—, *Positions*, Minuit, 1972 a.

—, *La dissémination*, Seuil, 1972 b.

Garrelli, Jacques, “Transduction et information”, in Gilbert Simondon : *Une pensée de l'individuation et de la technique*,

Albin Michel, 1994, pp. 55-68.

Stiegler, Bernard, *La technique et le temps-1. La Faute d'Épiméthée*,

Galilée/Cité des Sciences et de l'Industrie, 1994.

—, *La technique et le temps-2. La désorientation*, Galilée, 1996.

—, *La technique et le temps-3. Le temps du cinéma et la question du mal-être*, Galilée, 2001.

アリストテレス『形而上学（下）』（出隆記）¹、岩波文庫²、一九六一年。

米虫正巳「リクール、メルロー・ポンティとデカルト—Egoと主体性（1）—」『関西学院哲学研究年報』第三三輯、一九九九年、一一—四二頁。

廣瀬浩司「技術的対象の現象学—ジルベール・シモン・ドンの思想の射程（2）—」『東京大学教養学部外国語学科研究紀要』第四

三巻第二号、一九九六年、二五—四五頁。